

ワモンアザラシ「ミゾレ」死亡原因検証報告

ー はじめに ー

ワモンアザラシの（公益社団法人）日本動物園水族館協会（以下 JAZA）所属の国内飼育施設は3施設、生存頭数は10頭（オス：3頭、メス：7頭）であり、単独園館での繁殖推進は非常に難しく、施設間協力なしには飼育維持不可能な状態に至っております。当館の飼育個体2頭はいずれもメスで、オスの導入なくして種の継続はありえない状態の中、2023年11月大阪海遊館からオス「ミゾレ」を借り受け、今後の繁殖推進へ向かう貴重な機会を頂きその飼育管理に努めておりましたが、2024年6月19日早朝死亡いたしました。「ミゾレ」の死因について様々な視点から飼育状況の評価を行い、改善が必要と判断しこれを実施いたしましたので、その概要を以下に公表いたします。

1. 「ミゾレ」の飼育経過

23年11月28日 当館移動搬入。搬入時は落ち着いておりプールに入り採食も見られた。

12月1日 海遊館で給餌のシシャモを継続して給餌。同日からイカナゴを追加する。

12月中 寒さに対する体重増を目標に徐々にイカナゴの割合を増やした。

24年2月～3月中 食欲あり徐々に体重増加。遊び道具を入れる。

3月中 通常営業開始に伴い一般公開実施。観客を見て反応する時もあり。

6月 換毛期に入り、ハズバンダリートレーニング中離れたり陸上で休むこと多く、食欲減退といった換毛期特有の行動が見られる。

6月12日 給餌7回行うが、食べたり食べなかったりする。

日中、赤色尿確認。予防も兼ね抗生物質を経口投与する。

6月13日 朝プール落水し、エコー検査実施するが精査できず。採血検査実施し脱水傾向

及び白血球の増加があり補液と抗生物質投与する。少ないが食べる。

6月14～17日 少ないが食べている。補液と抗生物質投与する。

6月18日 朝抗生物質投与する。食欲はない。午後からプールに入り浮いていることが多い。夕方プールを落水し、エコー検査と採血検査実施。白血球多く全体的な脱水がみられ、投薬・補液を実施する。

6月19日 朝8:30死亡確認。

2. 死亡後の病理解剖結果と検証

①肉眼的病理解剖結果

1. 舌から胃にかけての出血性潰瘍およびびらん（ただれ）
2. 下腹部皮膚の複数の場所での脱毛（最大径3cm）

②組織診断結果

1. 上部消化管粘膜の複数の場所での出血とそれによる血管のつまり
2. 気管支内の粘液貯留
3. 複数の場所での慢性化膿性皮膚炎

③病理解剖結果からの検証

上記の所見から、最も顕著な病変は上部消化管（舌～胃）の出血性潰瘍で、穿孔や腹膜炎はなく出血量からもこれが死因ではないと推測される。また、他の所見はより軽度であり死に直結するものではない。組織剖検で寄生虫・原虫・真菌・細菌・ウィルスは全

て陰性であった。しかし細菌とウィルスは感染・病変部が特定の臓器に限定されない場合もあり、免疫状態が変化する換毛期に急激な悪化が見られたことから、剖検に反映していなくても細菌・ウィルス感染は否定できないと推測する。

3. 飼育環境や飼育方法などについての自己検証

飼育環境や飼育方法などについて、主観的観点に偏らない客観的検証を実施するため、今回は当館が所属している JAZA の「アニマルウェルフェア基準」に基づき、同チェックリストによる評価を実施した。同基準は、死亡検証に使用するものではなく、本来飼育動物の福祉向上を目的として日常的に実施するものではあるが、飼育状況の振り返り検証としてこれを使用し受入から死亡に至るまでの飼育管理状況を評価した。

<自己評価総評>

- ・ワモンアザラシという種の特性の発現よりも、当該個体の個に関する内容を優先し海遊館から情報を頂きながら日々の飼育を実施した。
- ・移動 5 日前から当館担当スタッフが海遊館へ出向き給餌やトレーニングを実施、また当館へ搬入移動後 4 日間は海遊館担当スタッフが当館へ来館し、上記同様に飼育管理の引継ぎを実施した。
- ・海遊館のユニフォーム（カップ、ジャンパー、長靴等）を借用し相当期間において当館担当者はその作業着で当該個体の飼育管理に当たり、飼育員が異なることへの環境馴致に注力した。
- ・入館当初は、当該個体を 1 頭だけにする時間を少なくし飼育スタッフが対応することでマイナスストレスの軽減に努めた。人依存は徐々に改善された。
- ・飼育施設は JAZA 適正施設ガイドラインに遵守しており、水温・気温・湿度・水質等、飼育環境に関して問題は見られず、同施設で飼育の先住個体に異常は見られなかった。
- ・冬期間の飼育状況においては、概ね予想通りに経過し体重も増加していたため、栄養面においては適切だった。先住 2 個体との合流を換毛後に予定していた。
- ・換毛期に入り採食量に日々むらが出ていたが、先住 2 個体同様に給餌頻度を上げ体力水分の低下を極力防いだ。
- ・ボールや浮き球などの遊び道具を導入した。物によって使用差があったが実施前後の行動記録が少なく、効果的であったか否かは評価出来なかった。
- ・当該個体の生い立ちから、単独飼育による精神面におけるストレス過多を疑ったが、病理解剖の結果からは長期にわたる個体への負担があったとは言えない結果であった。
- ・死亡後の病理解剖は同日道内の専門機関（獣医学系大学獣医）へ搬入し実施して頂いた。

上記の通り、小樽水族館として自己評価を実施しこれらを海遊館とも共有することで、現存個体そして次代を担う新しい命に対する飼育向上へ努める所存でございます。野生動物の習性や生態、行動はまだまだ未知な部分が多く、飼育に関わるスタッフが謙虚に生きものに向き合うことで知りえる事象も少なくないと感じています。現状や日常に甘んずることなく、「命」を繋いで行くために尽力したいと思います。

以上

2024 年 11 月 19 日 小樽水族館
館長 伊勢伸哉

※ この報告に関する質問・お問い合わせ等はお受け出来ませんのでご理解ください。